

「同時代に響く音色」

根本理加さんのクリスタルボウルの音色を、
私が初めて聴いたのは二〇一七年の三月だった。

神奈川県葉山の海岸で、初めてその音色に触れた。

当時はピンク、紫、虹色がかった半透明の

三つのクリスタルボウルだったように覚えている。

「リラックスした姿勢でどうぞ」と勧められて、
砂浜で横になって目を閉じていた。

寄せては返す波の音とともに、海岸に響くその音色は、
いままで私が聴いたどの「音」とも似ていなかった。

その「音」は、どこまでも自然体で、どこまでも透明で。

それは、クリスタルボウルの前に座る理加さんの姿と、同じだった。

不思議なことに、一つ、また一つと音が重なることに、
海岸の空気が澄んでいった。

寝ているのか、起きているのか。

聴いているうちに私の意識は、

その中間色のような空間にぼんやりと浮かんでいた。

演奏が終わったことを告げられても、

私はしばらく発する言葉を失ったままだった。

あの問題をどうにかしなくては。

そのために、もっと頑張らなくては。

早く、あの人みたいにならなくては。

追われるようにそんな思考で頭がいっぱいだった私は、

久しぶりに「何も考えない」時間を持った。

ただ、私はそこに、いた。

ほんとうは、いままでも、ずっとそうだったように。

葉山から帰った後も、

私はあの心地よい中間色のような空間に包まれた時間が、忘れられなかった。

そして気付けば、

私は日々の中で目を閉じる時間を持つようになった。

静かに目を閉じていると、

波の音とクリスタルボウルの音色が、聴こえてくるような気がしたからだ。

ときに朝に。

ときに夕に。

その時間は、ただ私がここにいることを思い出す、大切な時間になった。

あの、葉山の海岸と同じように。

・
・
・
・
・

大切なものほど、

なかなか素直に飛びつけないのが、人の性なのだろう。

眼を閉じると浮かんでは消えていくあの音を、

もう一度聴きたいと願いながら、私は腰を上げられずにいた。

その願いが叶ったのは、それから一年半後の、七夕の夜だった。

札幌のモエレ沼公園のピラミッドで、

クリスタルボウルを聴くという僥倖に恵まれた。

理加さんを囲むクリスタルボウルは、

その数を八つに増やしていた。

白いドレス姿で現れた理加さんは、

どこか遠くの国の女神さまのように見えた。

だからという訳ではないだろうが、

札幌で聴いた音色は、

神々しく、

神聖で、

それでいて崇高な祈りのような、

そんな音だった。

階段状になったピラミッドの床に腰を下ろし、
膝を抱えて俯いて聴いていた私は、
その祈りの色の海の底に沈んでいった。

父を突然亡くして、悲しみに沈む母の背中を、見た。

一人で暮らすには広すぎる実家のダイニングテーブルで、
独り寂しく夕飯を摂っていた。

不意に、海の底から水泡のように湧き上がる言葉が、あった。

「親孝行の一つもできなくて、ごめんなさい。

一緒にいられなくて、独りにしてしまって、ごめんなさい」

父と、そして母を亡くしてから十五年以上が経って、

遠く離れた北国のピラミッドの海の底で、私はようやくその言葉を見つけた。

ずっと見ないようにしてきた、罪の意識。

気づいてしまった私の瞳から、贖罪の涙がとめどなくあふれた。

祈りの音に、私は包まれていた。

祈りの音に、罪の意識もまた包まれていたようだった。

「少し、お戯れを」

理加さんがそう仰って、少し祈りの時間は伸びた。

気付けば父と母は、肩を並べて、
笑っていた。

涙で濡れた目を拭い、私は顔を少し上げた。

私が、いた。

理加さんが、いた。

八つのボウルの前に、座っていた。

それは、少女の八つのボウルとの戯れのようにも見えた。
それは、巫女の密やかな祈りの神事のようにも見えた。

見上げれば、クリスタルボウルを照らす灯りが、
眩い星のようにピラミッドの天井に輝いていた。

地上の祈り、
そして空の星。

祈りの音は、また残響となってピラミッドに響いていた。

・
・
・
・
・
・

悲しい報せを聞いたのは、それから半年経った頃だった。

薄いグリーンของクリスタルボウルが、
レコーディングでの輸送途中に割れてしまったことを聞いた。

チェロやコントラバス、あるいはベースギターといった低音楽器に、
なぜか心惹かれる私は、

札幌で聴いた心音のようなそのボウルの音をよく覚えていた。

あの薄いグリーンの色をしたボウルが割れた画像を見た瞬間、
どこか、私の身体の一部が千切れてしまったような気がした。

あの響きは、札幌からずっと私の一部だったのだと知った。

そして、いま、ここでクリスタルボウルが鳴っていることは、
決して当たり前なんかではない。

聴きたい音に、逢いに行こう。

それから三か月後、私は大阪へと車を走らせていた。

理加さんの音を、聴きに。

その大阪の地で聴いた理加さんの音色は、

どこまでも深く、

そしてゆらぎの中にも、

確かな強さを持った響きだった。

札幌でも音の海に沈んだけれども、それとはまた異質な。

札幌のピラミッドに響いた音色が、大いなる天啓による福音だとするなら、
大阪でのそれは、静かなる覚悟を持った人の意志だった。

ある確信を持って、理加さんは音を放ち、あの空間を彩っていた。

それは、紛れもなく、理加さんの音だった。

それは、どうしようもなく、理加さんの音だった。

「私は私でしかられない。

あなただって、きっとそうでしょう？」

確かな意志を持った音たちは、悪戯っぽくそんな問いかけをする。

もちろん、答えは分かり切っている。

理加さんの音が聴けて、よかった。

ゴールデンウィークの真ただ中、渋滞する帰りの高速道路の上で、私は心底そう思った。

・
・
・
・
・
・

嬉しい報せを聞いたのは、それから四か月ほど経った頃だった。

理加さんのクリスタルボウルの演奏を収録したCDである

「Crystal Bowl Resonance」がリリースされることを知った。

珠玉の五曲で奏でられるその音色は、

ときにやさしく私の身体を包み、

ときに私に深い内省の時間を与え、

ときにいつの間にか心地よい眠りへと誘ってくれる。

そうした時間がいつでも持てるという幸せを、

「Crystal Bowl Resonance」は与えてくれた。

そして、演奏の中で時折響く、

心音のようなあの音。

地球という一つの生命の鼓動のような、

背骨の芯に響くあの音。

あの薄いグリーンのカリスタルボウルの、音色。

その音色に、また出逢えたことが私には何より嬉しかった。

クリスタルボウルは、響きの余韻が長い。

それは大きな波紋がゆっくりと広がるように、聴く人を包み込む。

そのバイブレーションに触れた人が、

また誰かに触れるたびに、その波紋は干渉しあい広がっていく。

その誰かもまた、同じようにその波紋を広げていく。

いまも、そしてこれからも、

理加さんの奏でた美しいグリーンのカリスタルの音色は、
その豊かな響きをこの世界に与えて続けるのだろう。

ずっと、これからも。

そう、ずっと。

そう思うと、私はとても嬉しくなる。

・
・
・
・
・
・

クリスタルボウルは、それぞれが固有の大きさ、色、輝き、響き、そして音色を持っている。

それは、この世に二人として同じ人間はおらず、どの人もそれぞれ固有の美しい声の色を持っているように。

どのクリスタルボウルの音色も素晴らしく美しいのだが、理加さんは一つ一つのボウルの音色の高さ、響き、重なり、ゆらぎ……それらを混ぜ合い、つなげ合い、一つの演奏を紡いでいく。

それは、まるで印象派の絵画のように、世界の一つの姿を映し出す。

その姿は、「クリスタルボウルの音色」であって、「理加さんの音色」であるとも言えるのだろう。

同じ楽器と楽譜であっても、

演奏者によって全く異なる音色を奏でるように。

同じオーケストラのメンバーでも、

指揮者によって全く違う音楽を紡ぐように。

理加さんがクリスタルボウルで描くのは、唯一無二の理加さんの世界である。

葉山、札幌、そして大阪。

異なる地で聴いた理加さんの音色は、それぞれに思い出深いものだった。

これから、理加さんはどんな音色を奏でていくのだろう。

これから、理加さんはどんな世界を描いていくのだろう。

そんなことに想いを馳せながら、

今日も私はCDの再生ボタンを押し、目を閉じる。

私を包み込む、クリスタルボウルの音色。

薄いグリーンのボウルの音色も、聴こえてくる。

いつまでも鳴り止まない、心音のような、その音色たち。

その音色が奏でる、

珠玉の五曲を聴くたびに。

理加さんと同じ時代に生を受けた幸運を、私は感謝したくなる。

・
・
・
・
・

二〇一九年 白露のころ

根本理加さんとクリスタルボウル、

そして「Crystal Bowl Resonance」に、心からの感謝をこめて。

大寄 直人